

※次号は 2011 年 11 月 1 日発行予定です。

News Letter 第3号

2011年10月20日発行

発行人 本部長 主教 加藤博道

編集人 事務局長 司祭 中村 淳



いっしょに歩こう！
プロジェクト

日本聖公会東日本大震災被災者支援



仙台市ボランティア宿泊施設の環境整備



石巻市の被災者個人宅への支援物資配布



石巻市の仮設住宅での支援物資配布



石巻市の老人福祉施設の環境整備



岩手県一関市室根聖ナタニエル教会での“子ども会”



ボランティア宿泊施設の環境整備

ボランティア参加者の声

※本号は、学校の夏休みを利用して当プロジェクトに参加された、ボランティアワーカーの声特集です。

東日本大震災の被災地を訪ねて

ウイリアムス神学館3年生
ルシア 並里 輝枝

3月11日東日本大震災の被災者の為に、神学館で、教会実習先で、その他の集会で、又、一人でいつも祈っていました。今年のウイリアムス神学館の夏季実習は東日本大震災ボランティアに行き先生・神学生12人で、毎日移動しながら色々なワークをしてきました。宮城県東松島市の宮戸島漁協・市場の清掃では、草刈りしながら漁協のおばさんたちから神様、イエス様、教会のことなど次々と質問され思いがけない宣教の場となったのは驚きです。福島県相馬郡新地町の被災地に向かった時ですが、地震や津波で道路、線路、駅、家屋、車、船などが崩され壊され流され、平野に瓦礫とされ散らばっているのを見ますと声が出ませんでした。皆が必死に助け合う、助けることが出来なかった人、又、半壊した家屋や船に放火があった話等を聞くと心痛く、自然の怖さと人間の怖さを見せつけられた思いで、避難することができた磯山聖ヨハネ教会で逝去者記念礼拝をした時は涙が止まりませんでした。宮城県本吉郡南三陸町志津川も津波が激しく町全体を飲み込んだ様子だというのがすぐ分かりました。

津波が襲って来た時、避難するように必死にアナウンスした女性や病院・施設、町の人々が流される姿を助かった人々から話を聞いたあと心苦しかったのですが、ふと横を見ると瓦礫の中でひまわりが咲いているのです。鉄骨や木材の散らばった隙間から、海水が覆ったであろう土にしっかりと根つき大輪の花を咲かせているひまわり、草花の逞しさ、明るさ、優しさ、自然の凄さを同時に見せてもらった感じです。東日本大震災の被災地は膨大で、複雑で困難な状況の災害ですが、身近な人々に被災地の状況を伝え支援していく、そして、被災者一人ひとりを思い浮かべながらお祈りしていきたいと思っています。

東北の方々は我慢強く、遠慮深いと聞いていますが、声を出してくださればと思います。

沖縄の方言で『イチャリバチョーデー（出会えば兄弟）』出会い、交わり、助け合っていきたいものです。イエス様につながれて一つの体になっ

た私たちです。『お互い様！』をモットーに…そして、被災者一人ひとりを思い浮かべながら、神様にお祈りしていきたいと思います。

ワークショップひまわりでの実習を終えて

聖公会神学院2年生
クリストファー 永谷 亮

7月25日から8月12日までの3週間、聖公会神学院の夏期実習を室根聖ナタナエル教会で宿泊し、宮城県気仙沼市の知的障がい者就労支援施設「社会福祉法人洗心会・ワークショップひまわり（以下、ひまわり）」で、午前8時前からの朝礼～夕方の終礼まで、施設内外での利用者の方たちとの作業、施設の手伝いなどをさせていただきました。施設の職員、利用者の方、大切な方の被災も少なくなかったと聞きました。また、震災では開所目前の新施設が津波と火災で失われています。

ひまわりでは、菓子パンやクッキーを製造していますが、安定した取引先であった大型漁船への納品も震災で中断、クッキー販売も以前より厳しい状況と聞きました。販売の減少は利用者の工賃に影響します。窮状を知った方からの注文、「いっしょに歩こう！プロジェクト」の継続支援は、工賃を支えるだけでなく、毎日の施設での作業が利用者の方たちの笑顔にも直結していると感じました。

「クッキーの作業があることで、利用者さんたち一人ひとりも、復興のために何かができているということ強く実感しています。忙しくても、なによりこのことが嬉しいみたいです」と語ってくれた、職員のIさんの言葉が忘れられません。震災のゼロ地点で、今日を生き、明日に希望がもてるということは、なよりの糧になっていると確信します。そして、これらのどこかに今回私が関わらせていただけたことに感謝せずにいられません。

3週間にわたる実習では、職員と利用者の方たちとの出会いこそが、私にとってなよりの恵みでした。実習が終わり、施設をあとにして寂しさを感じています。みんなで手伝って作った菓子パン、クッキー、ケーキ。味覚でおいしいというのではなく、私の魂が「おいしい！」と叫んでいました。実習が終わった翌日の朝礼で、「亮さんは今日からお休みです」と所長がおっしゃってくださったそうです。小さな出会いから導かれて、そこ

で必要とされていることからさらに導かれて、様々な出会いと関係が育まれています。不思議でなりません。このようなつながりをしっかりと抱きしめたいと思います。そして、祈りを私たちもつないでいけたらと思います。

※立教池袋中高では、7/20～23に生徒8名(中学生4名、高校生4名)と引率2名の計10名で参加されました。

仙台ワークキャンプ



立教池袋中学校2年生

今田 侑汰

その時、ぼくは学校の部活中だった。3月11日、東日本大震災の発生。ニュースで見た東北の惨状。

東京での生活が落ち着くにつれ、被災地のために、何かぼくでもできることはないかと考えるようになった。だが、実際にそこで何が起こったのか、ぼくはその時何もわかってはいなかったのかもしれない。

仙台ワークキャンプは、実際に被災地に立ち、その現状を自分の目で見つめ、共に生きることについて考えることを目的としたものだった。参加者は、中高生合わせて8名。津波の被害の大きかった、宮城県亶理郡亶理町と石巻市を訪問した。巨大な津波が何もかも飲み込んでしまった海辺の町。あれから4カ月たった今も、崩れ落ちた家屋や家財の膨大な山があちこちに盛り上がり、確かにここで人々が生活していたことを知らしめる、食器やおもちゃなどが散乱する光景。それを目の当たりにした瞬間、ぼくたちは誰も声をせななかった。それは、テレビなどで見たはずのものとは全く違う悲惨な状況だった。あの震災の瞬間、ここで暮らしていた人々の恐怖を思うと涙が出た。そして、どんな思いで、この現実を眺めたのかと思うと、つらく切ない気持ちでいっぱいになった。

その後ボランティアの方々と一緒に被災者の宿泊施設を訪問。その時驚いたのは、ぼくたちを快く迎えてくれた被災者の方々の笑顔だった。被災地の光景に衝撃を受けて、どう接したら良いのかわからない状況だった。ぼくは反対に、その笑顔から元気と勇気をもらった気がした。誰よりもつらい状況下にあっても笑顔で頑張ろうとする、その強い心に感銘を受けた。

ぼくは、この経験を忘れない。自然の脅威がど

んなに恐ろしいものであるかを思い知らされたあの光景を。そしてそんな状況下にあっても前を向いて頑張る人々の笑顔を、ぼくは決して忘れない。今回のキャンプで、ぼくたちが手伝えたことは、ボランティア宿泊施設の地面の整備などほんの少しだったが、ぼくは何よりも大切なことをたくさん学んだ。マスコミを通じて知る情報には限りがある。わかっているようで、実は何もわかっていなかったことがたくさんある。実際に被災地に立ち、現状を見つめ、被災者の方々の声を聞きボランティアの方々の活動を知る。そのことが、これからぼくたちがどう生きて行けばよいのかを深く考えるきっかけになったと思う。人間は一人ではない。住んでいる場所は違っても、復興に向け、今自分にできることを考えていこう。

厳しい状況下、ぼくたちのためにこのような企画をして下さった先生方、そしてお世話になったすべての方々に感謝します。どうもありがとうございました。

※香蘭女学校(中・高)では、8/16～19に生徒20名、8/29～9/1に生徒25名が参加されました。

ボランティア活動をしての感想

香蘭女学校5年生

末藤 亜弥

心にどーんと何か重たいものが降ってきた。360度見渡すかぎり何もなかった。家の土台にのこる瓦や茶碗のかけら。道路のわきにはサビついた車や船がゴロゴロあった。小学校の校庭のがれきの山にはぬいぐるみやサッカーボールが見え隠れしていた。

私が今立っているところ、見ているところでたくさんの方が亡くなったわけで…それが信じられなかった。それ以上に、そこで人が生活していたということが信じられなかった。「これからどうするのだろう。」行く先々で、そればかり考えていた。

ボランティアに参加する前は、東北というところはどこか遠い場所で、そこで起こっていることは私にはどうすることもできないことなのだ、と



第1期の皆さん



第2期の皆さん

勝手に思っていた。しかし、実際は東京から新幹線で2時間と少しで行けてしまうところで、テレビや新聞で報道されていること以上のことが起きているのだ。

被害を受けたのは建物や土地だけではない。被災者自身の心にも大きな傷が残っている。それは現地へ行って、現地の方と話してみてもわかったことだ。

私たちが仮設住宅で配った支援物資の中には、何のために送ったのか、とても支援とは思えないものたくさんあった。物が十分でない被災地では、私たちが送る支援物資に被災者の方の生活がかかっている。送って終わり、なのではなく、それは送った以上、確かに人の手に渡るものだ。何気ないものがとても喜ばれたりもする。被災地では、私たちが日常使う物すべてが必要とされている。物に囲まれた私たちには、あたり前にあるものがない、という感覚がわかっていない、とつくづく感じた。

仮設住宅で被災者の方たちの笑顔を見たとき、私の緊張は少しやわらいだ。私たちはこの笑顔を支援していかなければならない。この笑顔はきっとプラスの何かにつながっているはずだ。そして、東京にいる私たち自身ももっと笑顔を大切に、今回の、このボランティアでの経験を忘れないように生きていきたい。

「いっしょに歩こう!プロジェクト」に参加してー

名古屋柳城短期大学キリスト教センター

尾上 明子

このたび、名古屋柳城短期大学は、年度当初の予定にはなかった「いっしょに歩こう!プロジェクト」の活動に急遽参加させていただく機会を得、現地スタッフの方々と連絡をとり、また下見などの準備をしながら、9月1日~4日まで次のようなプログラムを実施させていただきました。7月上旬、ボランティアの募集をしたところ、1日半で定員の2倍以上の学生が応募しました。潜在的には、まだまだ多くの学生がいたことでしょう。結

果的には学生18名、スタッフ5名の引率で2班に分かれての活動となりました。ひとつは、仙台を拠点にしながら、宮城県亘理郡山元町ふじ幼稚園訪問(園は被災のため区民館での保育)、南三陸町志津川(フィリピン女性の支援の一環で子どもと交流)、ひとつは、本学の卒業生とかかわりのある宮城県気仙沼市 愛耕幼稚園訪問、岩手県一関市室根聖ナタナエル教会での子ども会主催などが主な内容で、両者のグループの共通は被災地に立つということと子どもたちとの交流でした。

ボランティアというには、到底及ばない活動でしたが、現地に立ち敵しい現実を自分の目で見、体験者のお話を聞くという経験は何にも変えがたいものとなりました。また、子どもたちとの交流を通して励まされ、現地の保育に携わる方々のまさに命をかけての保育や支援に「保育とは何か?」という原点を見せていただいたように思いました。

参加者の多くの学生にとって、今回の経験は、心の深いところで刻み込まれたことでしょう。本学は、今回の学生たちの経験を全学で分かち合いたいと少しずつ振り返りの時間を持ちます。学生たちの振り返りは本格的にはこれからですが、今現在、寄せられている感想の一部を紹介したいと思います。

9月2日「仮設のふじ幼稚園へ訪問しました。子どもたちは、とても元気で素直な子どもたちだなと感じました。でも、かかわっていくうちに、『高く積んだ方が安全なんだよ』という声が聞こえてきたり、お葬式ごっこをしている子もいました。子どもたちの遊びのなかに、津波で体験したことや身の周りで起きたことが入り込んできているのがよく分かりました。楽しくきれいな色でお絵描きをしても、『津波で流されちゃったんだー』といきなり言ってきたり、今でも雨の日は外に出るのが怖いという子もいました。被災したふじ幼稚園を見せて頂きました。流されてしまった8人の子どもと1人の先生のことを思うとお祈り中に涙がとまりませんでした。」



「いっしょに歩こう!プロジェクト」事務局

【open】月~金 10:00~17:00 【close】土・日・祝

〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町3-4-5 クライスビル2F

TEL:022-265-5221 FAX:022-748-5321

E-mail:walk@nssk.org URL:http://www.nssk.org/walk/

※第2号掲載記事に誤りがありました。お詫び申し上げます。
5ページ右上の表の津波による半壊の数 誤「38」→正「19」